

活構造学講座

本研究室は、大学組織としては昭和 12(1937)年に開設された第四講座の流れを継承している。当初、火山・温泉物理学講座として設置された第四講座は、昭和 20(1945)年に応用地球物理学講座と改められ、岩石や地層の弾性波物性の違いから地下構造を推定する地震波探査法が研究された。平成 6(1994)年には大学院重点化に伴う改組により、旧・地殻物理講座（第一講座）、地震学講座（第六講座）と応用地球物理学講座（第四講座）を合わせた大講座（固体地球物理学講座）が新たに設置されるとともに、第四講座は地殻物理学研究室（新・地殻物理学講座）と改称された。地殻物理学研究室では、変動地形学や新生代地質学に基づく調査や、反射法地震探査による地殻構造の解析が行われた。特に平成 7(1995)年の阪神淡路大震災を契機として、内陸の活断層の分布や活動性についての調査が重点的に行われるようになり、平成 14(2002)年には研究室（小講座）名称が活構造学と改められた。その後は研究対象も広がり、隆起サンゴ礁から海溝型巨大地震の発生履歴を推定する研究も行われた。現在は、断層の摩擦すべりや沈み込み帯における地震発生の物理素過程、造構運動を支配する地殻強度や延性変形のメカニズムの理解をめざして、岩石力学実験や構造地質学的な手法による研究が行なわれている。平成 30(2018)年に理学部 1 号館に設置された固体圧式変形試験機では、高温高圧下での地球物質のレオロジー物性についての研究が進められている。